

## クンプ・ポルツェ村の小学校見聞 —近代学校教育導入に関する若干の考察—

村上満希子

立命館大学国際関係研究科

ネパール、クンプ地域にヒマラヤントラストの一環として近代学校（通称ヒラリースクール）が設立されたのは今から約20～30年前のことである。今日では「学校の無い地域は援助対象地域」とみなされるほど重要視されており、この地域のみならず世界各国でこれに対する援助プロジェクトが展開されている。クンプ地域の村落ポルツェに設立された学校とその周辺における見聞を通して地域開発と援助について若干の考察を試みたい。

### 1 はじめに

ネパールは、アジアの中で最もU5MR（5歳未満児死亡率）、非識字率の高い国である。

政府は1977年より小学校教育無償制度を確立、翌年には教科書を3年生まで無料にするなど小学校教育を奨励して学童数を増やす計画を立てた。1960年に男子19パーセント、女子1パーセントであった小学校就学率は、1980年代後半には84パーセント、35パーセントと大幅に改善された。しかし、そのうち小学校を最後まで終了する者はわずか27パーセント[UNICEF1992]であり、中途退学者の増加が深刻な問題となっている。教育は、教育のみで独立するものではなく、その地域の生活様式、経済、環境、保健、等の問題と密接につながっている。したがって、教育面での前進はこれらの問題の改善につながるとして、世界各国が各地で教育に対する援助プロジェクトを展開している。

ネパール、クンプ地域にヒマラヤントラストの一環として近代学校（通称ヒラリースクール）が設立されたのは、1960年代のことである。今回この地域の1村落ポルツェとその周辺の村落を訪れた。近代学校教育と住民の生活を観察することを通じて、地域開発問題や援助について若干の考察を試みたい。

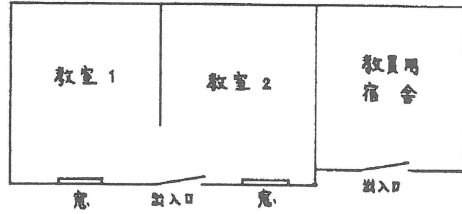
南と呼ばれる国々の中でも、ネパールの女子の非識字、未就学の割合は非常に高い。小学校に通っている者は1990年の統計で2,788,644人、女子のみで1,003,810人、すなわち全体に対する女子の割合は36.0パーセントと低い。ソル・クンプ地域について見ても、16,066人のうち女子が5,982人、全体の37.2パーセントである[H.M.G.MOEC 1990:21]。ところが、クンプのみに限った女子の割合は1971年の統計で44.4パーセントであり[Lang and Lang 1971]、クムジュンスクールの先生の話によると、最近では女子も男子も皆小学校（クムジュン）に入学し、4年程度まではほとんどの子どもが通い続けるという。このように、クンプ地方の就学状況は国内他地域のそれと異なる。今回訪れたポルツェ村では、さらに、他地域とは全く逆の状況が存在していた。就学児童数は男子6人、女子18人で、小学校に通う者全体に対する女子の割合は75.0パーセントである。

### 2 ポルツェの小学校と教育

クンプ地域に小学校が設立されたのは、1960年代のことである。61年にクムジュン、63年にパンボチエ、ターメ、64年にはソルのズンベシ、チャウリカルカに、そしてナムチエにそれぞれ設立された[Fisher;1990]。ポルツェには68年、(表1)

表1 クンブ地域の学校 (人)

学校	児童			教員
	男子	女子	合計	
ナムチェ	18	35	53	3
クムジュン	96	51	147	5
ターメ	15	33	48	2
ボルツェ	17	6	23	1
パンボチェ	14	14	28	2
タンボチェ	14	0	14	1
合計	174	139	313	14



校庭 (運動場)

図1

(出所) Lang, S.D.R. and Lang, A (1971) The Kunde Hospital and a Demographic Survey of the Upper Khumbu, Nepal, The New Zealand Medical Journal, 470.



写真1 小学校から見たボルツェの風景



写真2 ボルツェ小学校舎

によればタンボチェにも71年までには設立されたことになる。クムジュンスクールはその後高等中学校(10年生)まで拡張された。クムジュン以外の小学校を卒業した者が中学校への進学を希望する場合、クムジュンに通うか寄宿して通学することになる。

### 1) 小学校の様子

ボルツェは標高3840メートルに位置する。人口は1971年のデータによると257人で、正確なことは未調査であるが、現在も250人程度であると聞いた。戸数は約50である。

ボルツェの小学校の校舎は、およそ4m×3.4mの教室二つと教員用宿舎一つとから成る(図1参照)。壁は石を積み重ねたものに泥を塗ったもので、屋根は波板であった。窓が各部屋に一つずつ付いている。教室内には古びた黒板や各種教材が備えられていた(表2、写真3参照)。照明器具は無いので、普段天気の良い晴れた日には校舎の前の小さな運動場(約10.3m×14.3m)

に長椅子、長机を出して青空教室を行う。具体的な授業形態は、教員が、学年ごとに分かれて自習する子どもに対し見回り指導するというもの、そして体育や音楽などの授業は全学年合同で指導するものとあった。カリキュラム、スケジュール等は、ネパールにおける他の小学校と同じで、国語（ネパール語）、算数、理科、社会、芸術で、4年生より古文（サンスクリット）、英語、保健、道

徳が加わる。教員に対するサラリーは、現在ネパール政府の基準にしたがってネパール政府によって支払われているが、クムジュンスクールでの見聞によると、エベレスト初登頂を果たしたヒラリー卿を中心とした外国の援助によって若干のボーナスが支払われているとのことである。また、寄宿している中学生や中学校を卒業した者のうち一部の者に、カトマンズの大学へ通うための奨学金

表2 ポルツェの小学校

就学児童数	男子6人 女子18人 (1年生 7人、2年生 5人、3年生 6人、4年生 3人、5年生 3人)
教員	3人 (ライ、ネワール、チェトリ)
設備	
校舎	約4m × 3.4m の部屋 2 (同じ大きさの教員用宿舎 1) 壁は石を積み重ねたものに泥を塗ったもの。屋根は波板。 窓、各部屋に 1
備品	黒板 2 教材、書類をしまう戸棚 1 一人用木製椅子 4 事務用机 1 長椅子 7 長机 8 王室関係の写真 6 国歌、国旗のポスター 2 国旗 1 地図 4 (ソビエト、世界、ネパール、ディストリクトを色分けしたネパール) その他教科学習用ポスター6 マーダラー1 (ネパールダンスを授業で行う時に使う太鼓)
運動場	約10.3m × 14.3m
カリキュラム	ネパール語 (国語)、算数、英語、社会、体育、理科、道徳、芸術
中学校への進学率	1992年現在、中学 2年に 1人 (女子) がクムジュンに寄宿、通学 寄宿代 1000Rs (ヒラリーによる奨学金 400Rs、他仕送り) 授業料免除 (山岳地帯女子に対する政府の対応。男子は月20Rs支払う。) 男子 2人中途退学

1992年調査より



写真3 教室1

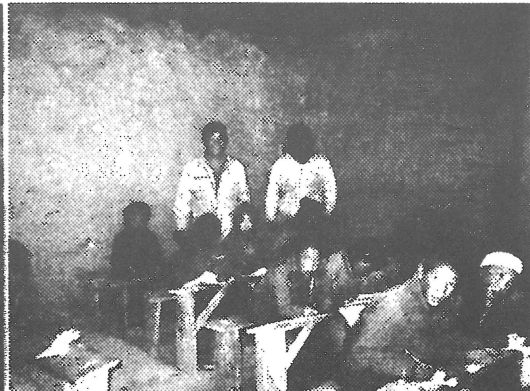


写真4 試験風景、教室2

が与えられる他、設備や本、教材に対する援助もなされている。

ライ、ネワール、チェトリ出身の教員が3人で授業を行う。しかし、必ずしも3人ともが常時授業を行っているというわけではなさそうであった。訪問したのは、ちょうど年に2回行われる試験のうちの後期試験の季節であったが、試験開始の日以前は一人の先生が休暇中であった。クムジュンスクールの先生の話では、ボルツェの先生は度々授業をさぼり、交替で一人の教員が授業を行っているという。試験中に歌を歌ったり試験の答えを子どもに教えたりする先生の姿や、子ども達の、学んだはずのネパール語と英語をほとんど実際には使えない様子、等も含めて察すれば、授業や試験は極めて形式的なものであると捉えることが出来る。

クムジュンスクールでは、学年別の教室と授業が用意されており、従って教員も学年別同時授業を可能にする人数が揃っている。この学校では1年生のレベルに達しない者のための予備教育が実施されているので小学校には予備教育担当教員1人、小学1～5年生担当5人、計6人の教員がいる。また、試験中の様子は日本と変わらず厳粛な雰囲気であった。最近カンニングをする生徒があるので教員がそれを厳しく取り締まっているそうである。

## 2) 教育意識

以上のように学校の設備、授業、試験の様子などをクムジュンスクールと比較してみると、ボルツェの小学校に子どもを通わせている母親が「クムジュンの学校の方が良い」と漏らしていた心情が少しは読み取れそうである。しかし、だからと言って、クムジュンの学校に通わせるとか、自分の村の学校を良くして行くというような行動を起こそうとする人はなさそうである。教師になろうと思う人すらこの地方にはめったにいない。一人、クムジュンスクールの中学校にシェルパ出身の教員がいる。彼は、カトマンズの大学を出、この地域に帰り、教師になった時村の人々から中傷を浴びせられたという。「せっかく大学を出たのに教師なんかになるなんて、頭がどうかしている」と。それほど教師の地位は低く見られている。給料の

面でも、この地域の人々の主な仕事であるトレッキング関係の職に就いたほうがよほど高収入を得られるそうなので、なおさら教師という職業は敬遠される。

当シェルパ地域ではシェルパ出身の必要性が大きい。何故ならその地域の人が求める教育や、地域の特性、伝統を生かすこと、さらには住民、子供の参加を促すことと深く結びついているからである。シェルパ出身でなくとも、同じ村に住み、村のことをよく理解し尊重し、シェルパ語を話し、教育に対し熱意のある先生であれば、自然に子どもやその家族の人々との対話がなされるであろう。そうした中から住民の学校に対する要望や子どもの希望が汲み取られるであろうし、子どもを学校に惹き付ける結果になる。

ボルツェの教員は、3人ともシェルパの出身ではなく「私たちはシェルパ語もシェルパの文化も知らない。」と話していた。また、教員が子どもや子どもの親と親しく話す様子を一度も見なかった。

教師としての使命と誇りを感じている者が著しく乏しいことはネパール全体の問題として指摘されている [伊藤邦幸・入江拓1992] が、ボルツェの小学校教員にも当てはまるかもしれない。この点の改善策として、ボルツェの小学校の先生が求めている教師に対する待遇、設備の充実などがあげられようが、それ以上に地域出身の、あるいは教育に対し熱意を持つ人の必要性は大きい、と言える。

また、これは教師にのみ要求されるものではない。一人一人が教育に何を求めるのか、学校に対してはどうか、村外あるいは国外より導入された近代学校教育というものに参加するのか、するなら主導的運営が求められるのではないか。その地域に住む人々と学校、教員との連携プレーの中で教員の問題も設備の問題も解決し得るのではないだろうか。

## 3 村落経済の変化と教育

### 1) 伝統的生業

シェルパの生活は、本来は農耕と牧畜、それに交易を有機的に結びつけることによって成立していた [鹿野勝彦1992]。農耕は主にソバを作物と



表3 訪問目的別観光客数 (人) 各年の下段数字:合計に対する割合

目的	余暇	トレッキング・登山	商用	公用	その他	合計
年						
1975	70124 75.9	12587 13.6	4911 5.3	4227 4.6	591 0.6	92440 100.0
1980	130600 80.2	19302 11.8	5491 3.4	4654 2.9	2850 1.7	162897 100.0
1985	128217 70.0	28707 15.9	10416 5.8	9230 5.1	4419 2.4	180989 99.2
1990	168552 66.1	39999 15.7	11728 4.6	29416 11.6	5190 2.0	254885 100.0
1991	177370 60.5	42308 14.4	14601 5.0	37274 12.7	21442 7.4	292995 100.0

(出所) H.M.G.Ministry of Finance (1992) ECONOMIC SURVEY  
FISCAL YEAR 1991-92 より作成

表4 サガルマタ国立公園入山者

年	人
1971	1406
1973	3530
1975	4254
1979	4348
1980	5310
1981	5092
1982	5066
1983	4980
1984	5840
1985	6909
1986	7834
1987	8430
1988	7683
1989	8290
1990	10343

(出所)河合[1992:54]

していたが、19世紀後半からはジャガイモの生産が取り入れられ、現在ではこれが主食となっている。牧畜ではヤク、ウシ、そしてこの両者を掛け合わせたゾーを主に飼育している。これらの家畜は主に乳用荷の運搬用にされている。また、糞は燃料としても用いられている。厳しい自然環境のもとで農耕と牧畜をできるだけ効率よく行うために、シェルパの世帯は、高度の異なる数箇所に家や畑、牧草地を持ち、季節に応じて人と家畜が移動していく [鹿野勝彦 1992]。冬の間は耕作が出来ないので家畜を家、畑の側で飼い、夏には牧草地となる高地へ移動させる。

また、シェルパにとって交易はもう一つの重要な生業活動であった。ヤク、ゾを輸送手段としてチベット産の羊毛や岩塩、ヒマラヤ南面産の穀物といった、シェルパ自身にとっても必需品である品々をはじめ、中国産の茶や陶磁器、インド産の綿布や砂糖といった品々を扱ってきた [鹿野勝彦 1992]。

## 2) 観光地化

今世紀に入り、人口増加に伴う余剰労働力がインドダージリン地方の主に茶のプランテーションへ移動する。この人たちの一部が1920年代、ダージリンを起点としてチベットからエベレストを目指した英登山隊に雇われ、ハイポーターとして頭角をあらわす [鹿野克彦 1992]。その後 1950年代には、自分たちの住む村を含んだ身近な場所でポ

ーター、ガイドをし、その賃労働から現金収入を得るようになる。

ネパールでは、観光業による収入が外貨獲得の重要な手段となっている。訪れる観光客の数は年々増えている (表3参照)。1990年に登山及びトレッキングを目的にネパールに入国した外国人は39,999人、観光客全体の15.7パーセントである。この内クンプ地域を訪れた者は10,343人である (表4参照) から、登山、トレッキングを目的にネパールに入国した外国人の内、同地域を訪れた者の割合は、25.9パーセントということになる。(表4) から分かるように、クンプ地域を訪れる人数もほぼ増加傾向にある。

観光客増加に比例して様々な雇用の機会が生み出されていった。雇用機会は、二つに大別される。すなわち (1) 食堂兼ロッジの建設、経営にみられるように飲食、宿泊経営及びトレッキング用品、衣料、食品を販売する常設店舗経営などに関連する職種と、(2) シェルパの伝統的職種である高所ポーター、ガイド、荷役などの職種である [河合 1992:55]。ナムチェバザールはこの地域の交易の中心地であること、またゴーキョ方面とエベレストB.C.方面のトレッカーが共にこの村を通過あるいは高度順応のために滞在することから、(2) のようなロッジやトレッキング用品店が年々増加しており、クンプ地域の首都とも呼ぶほどのにぎわいである。

反対に、ポルツェ村は、ゴーキョ、エベレスト

B.C.両方面への街道からは少し外れた田舎の小さい村である。しかし、ゴーキョ方面の街道沿いポルツェ・テンガから徒歩約1時間、エベレストB.C.方面の街道沿いタンボチェからは約1~2時間の所に位置し、トレッカーが全く立ち寄らないわけでもなく、さらに、ナムチェを始めとした外界との接触は比較的容易である。また、ポルツェにはナムチェにあるような常設店舗は無いがロッジが2軒ある。

若い男性の姿は滞在中ほとんど見掛けなかったが、11月の末からまばらに見掛けるようになった。これは、トレッキング関係の仕事に就いているため、12月から2月の間は季節柄トレッカーが減るのでその間休みにするそうである。(滞在中にいたロッジの住民は老人を除き、冬の間カトマンズの親戚の家にいるのだそうである。) また、表5からも分かるようにすべての村において、農牧に従事する人口が減少しトレッキング関連の仕事に就く人が増えるという現象が見られ、こうした村落経済の変化がポルツェ村にも確実に押し寄せていると考えられる。このことは、子どもの将来に対する希望調査で18人中4人が観光業に携わることを望んでいるという結果(表6)にも、いくらか反映していると考えられる。

### 3) 経済的变化と小学校就学状況

各家庭に所得格差はあるだろうが、トレッキング関係の仕事に就くことで、人々は現金収入を確実に手に入れることが出来るようになった。

男子はかなり早い時期からガイドやポーターの仕事始める。親、兄弟がそうした仕事に就いている場合は特に、10才くらいから開始するという。ポルツェの小学校に男子が少ない理由はここにある。逆に、収入が増加するという経済的な変化が、従来あまり重要視されてこなかった女子の教育に一定の成果を与えたと考えられる。しかし、「男子は仕事出来るけれども女子は出来ないし、他にすることが無いから」学校に行くのだという消極的な意見を耳にした。やはり女子よりも男子の誕生を喜んだり、女子の教育を不必要と考える風潮が存在する [Fisher,1990] のだろうか。

一方で、将来に対する希望調査の結果(表6)は年少より社会に出てトレッキング関係の仕事をする男子よりも、一般にそうでない女子の方が発想が豊かであることを示すかもしれない。また、昔は一家に一人子どもをゴンパ(寺院)に入門させたといわれている。それが口減らしの手段でもあった。今ではそれが減り、ラマ僧になる人すら激減しているそうである。小学校は、日本の小学校のように給食が出るわけでもなく、昼休みに各

表5 シェルパ、チベット住民の主たる生業  
1970-1982

職業	年	人	パーセント
エクスベディション ガイド	1970	178	9.7
	1982	256	14.9
農家	1970	392	21.5
	1982	150	8.8
使用人	1970	20	1.1
	1982	69	4.0
ラマ,ナン	1970	212	11.6
	1982	114	6.7
商人,店主	1970	59	2.2
	1982	68	4.0

(注) 15才以上の成人対象

(出所)Ivan G.Pawson (1984) EFFECTS OF MODERNIZATION ON THE KHUMBU REGION OF NEPAL, CHANGES IN POPULATION STRUCTURE 1970-1982 Mountain Research and Development Vol.4, No.1 より作成

表6 将来の希望(人)

	男子	女子
先生	2	2
エクスベディション ガイド	1	
トレッキングガイド		1
ポーター		1
店主		1
ネパール舞踊家		1
博士		1
政治家		1
ドライバー		1
エンジニア		1
外国に行く		1
無解答	1	

(注)1年生6人を除く合計18人(男子4人,女子14人)対象  
(出所)1992年調査

自家に帰ることから、口減らしの手段にはなり得ない。やはり、経済的に余裕が出来たことで家事にも余裕が出来子供の仕事も自然と減っているものと考えられる。

しかし、一部の子どもがナムチェヤクムジュン、クンデの富裕な家庭あるいはロッジに住み込み、働いていると聞いた。これらの地域の人はゴーキョやエベレスト方面にカルカをもっていて、その街道をポルツェの住民も頻繁に利用することから交流があるのだそうである。このように出稼ぎに出ている子どもの仕事は、子守、家畜の世話、薪集め、水汲み等である。もちろん彼らは小学校に通っていない。

村落の経済が変化し、トレッキング関係の仕事によって誰もが現金収入を確保することが出来るようになった。その代わりに貧富の格差というものも広がりがつあるのかもしれない。このことについてはさらに今後調査、研究を重ねていく必要がある。

#### 4 多言語多民族国家としての問題

小学校で施行されているカリキュラムは前述のように政府の定めるものに準じており、したがって、シェルパ独自の言語及び伝統的な文化は学校の授業の中では教授されない。その代わりに芸術の授業でネパール民謡、ネパールダンスが教えられ、さらに、授業開始時には国歌を、道徳の授業では、国王、皇室について教授されている。

クムジュンスクールで行われていたチベットの絵画や機織り (Traditional Sherpa weaving) の授業などは、シェルパの文化を伝えていくという機

能のみならず、シェルパの芸術について知りたいと望む子どもを学校に来させる誘因になるとして評価された [Fisher1990]。しかし、機織りはその後「手工芸」(handicraft) と名称が変えられたが、絵画も含めて現在では全く行われておらず、handicraftの教室は倉庫と化しているそうである。週末になると地方から多くの人が集まりバザールが開かれるナムチェでは、夜になると西洋の音楽が聞こえるし、インドから入ってくる映画もみられている。「今の若者には、シェルパのダンスよりも西洋の音楽に合わせて踊るディスコの方が容易に受け入れられる。」という話も耳にした。シェルパは比較的その民族的アイデンティティーを保持しているといわれる。しかし、外国からの多大な情報が急速に流入する特殊な地域に住み、独自の言語を読み書きするという習慣を持たず、逆にネパールという国家の推進する道徳、ネパール語、ネパール文化を身につけた新しい世代の子どもたちは、今後どのようなシェルパ社会を築いていくのだろうか。シェルパだけでなく、ネパール全体の、強いては多言語多民族国家共通の問題として考えていかねばならない事柄であろう。ネパール新政府は、ネパール語だけに限定せず母語の使用に対してもその必要性を認め一つの科目として取り上げることを目指している。この方針が今後どの程度実施され、地域の人々が実際にどのように展開させて行くか、が注目される<sup>2)</sup>。

#### 5 おわりに

ポルツェ村の学校における教育の内容、充実度を見ると必ずしも学校へ行くことが真に子ども達



写真5 校庭にて

の心身の発達にとって全面的な助けになっているとは言えないことが分かる。授業終了後や授業の無い日、子ども同士で遊びながら燃料用の家畜の糞を拾っている姿の方がよほど生き生きとして見え、普段の生活に密着した、何かしら学ぶべきものを自ら吸収しているようにも感じられた。

近代学校とはそもそも西洋に始まり、今では「学校の無い地域は援助対象地域」とみなされるほど重要視されている。ネパールの他の多くの地域でも各国の援助によって学校が着実に増やされている。ところが、学校設立に限らず単なる上からの開発というのは、地域の人にとって意味を成さないことや、有害になる恐れがある。このことは、戦後、世界各地での援助プロジェクトの成果が示す通りである。

政治経済の変化、外部からの援助プロジェクトは、住民の生活を変化させていく。その変化の善し悪しの判断は個人に任されている。より良い方向に発展させていくためには、地域住民一人一人に、主体的に考え判断し行動する態度及び能力が求められる。教育はこれを助ける大切な役割を担っていると同時に、教育自身もまた、こうした中においてこそ発展していくのではないだろうか。

#### 注)

- 1)1971年の統計(表1参照)では、ナムチェ及びターメにおいて同様の状況が存在した。
- 2)近年、ナムチェを中心とした若者の間に彼らの文字やその他の文化を維持しようとする意識、あるいは動きがあるらしい。

#### 文献

- Fisher, James F., (1990) SHERPAS  
H.M.G. Ministry of Education and Culture (1990) EDUCATIONAL STATISTICS OF NEPAL  
H.M.G. National Education Commission (1992) Report of the national education commission. 1992 (Executive Summary)  
H.M.G. Ministry of Finance (1992) ECONOMIC SURVEY FISCAL YEAR 1991-92



写真6 放課後、家畜の糞拾いをする仲良し

- Ivan G. Pawson (1984) EFFECTS OF MODERNIZATION ON THE KHUMBU REGION OF NEPAL, CHANGES IN POPULATION STRUCTURE 1970-1982 Mountain Research and Development Vol.4, No.1  
Lang, S.D.R. and Lang, A (1971) The Kunde Hospital and a Demographic Survey of the Upper Khumbu, Nepal, The New Zealand Medical Journal, 470.  
伊藤邦幸・入江拓 (1992) 近代学校教育。石井溥編 もっと知りたいネパール。弘文堂。  
鹿野勝彦 (1992) 民族。石井溥編 もっと知りたいネパール。弘文堂。  
河合明宣 (1992) シェルパ村落経済の変容。ヒマラヤ学誌第3号  
国連児童基金 UNICEF (1991) 世界子ども白書1992